

特集：主体的・対話的で深い学びをめざす教科用図書・教材の活用
思考の活性化をさせる授業：
外国語活動・外国語科の教材をどう扱うのか

福田スティーブ利久（文教大学教育学部）

マーク・グレアム・フェネリー（四国大学文学部）

Authentic Active Learning in Elementary School Foreign Language Classrooms

FUKUDA STEVE T, FENNELLY MARK G

(Faculty of Education, Bunkyo University)

(Faculty of Literature, Shikoku University)

要 旨

主体的・対話的で深い学びは単に児童生徒が積極的に参加している授業や見た目が楽しいペアやグループワークを取り入れた授業ではない。主体的・対話的で深い学びとは思考を活性化させる授業である。問題解決学習や体験学習等はイメージできるが、教科書や補助教材を活用したこの「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善 (MEXT 2017)」となるとイメージがしにくい教員は少なくない。本稿では、外国語科・外国語活動の教科書・補助教材の活用法に悩んでいる教員と共に、思考を活性化させる授業のための教材活用法を紹介したい。

1. はじめに

人間にとって、学ぶ力と動機は生得的なものである。赤ちゃんが言葉を習得していく過程で親の真似をする姿や、幼児が歩けるようになるまで何度も転び何度も立ち上がる姿、また、子どもが「なぜ？」を連発する姿を想像すると理解に難くないはずだ。しかし、どこかでこの学ぶ力と動機が弱体化する。今までの外国語教育は知識・技能を中心に指導してきたが、新学習指導要領に示されている「思考・判断・表現力」・「言語活動の定義」及び『主体的・対話・深い学び』をきちんと理解すれば、さらに学びに向かう力を養える外国語教育が実現するかもしれない。

文部科学省の指導の下に作成された教科書や補助教材は「良くない」、「使いづらい」、「つまらない」と良く耳にする。しかし、それは教科書や補助教材を指導書通りに使用し

ているからではないだろうか。例えば、前触れもなく、「さあ、教科書の～ページを開けて、聞いて答えなさい。」という指示を出し、活動を淡々と進めてはいないだろうか。この教科書・補助教材の自由度は高く、個々のクラスと生徒のニーズに合わせて利用することもできる。そうでなければ、教科書メインの授業になり、児童生徒の主体性もなく、彼らから英語が「難しすぎる」や「面白くない」等の意見があってもおかしくない。従って、新学習指導要領の理解は欠かせない。本稿ではこの新学習指導要領を取り上げた後、どのように教科書・補助教材を利用すれば、思考を活性化させ、学ぶ力と動機をさらに高める外国語教育の授業実践になるのかを考えたい。

2. 思考の活性化とは

新学習指導要領では児童生徒が「どのよう

に学ぶのか（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）」が示されており、それは主体的・対話的で深い学び、つまり、アクティブ・ラーニングの視点からの授業実践を通して実現される(MEXT 2017)。山地氏(2015)や竹内氏(2015)によれば、真のアクティブ・ラーニングは今までの「知識注入、知識の定着を評価」の学習形態ではなく、思考を活性化させる学習形態であると示唆している。また、「技能の習得のための活動」に止まる学習形態でもない。活動の前後にクラスメートと関わっていく中で、自分の考えに違和感を覚えたり、自分の答えに疑問を持つようになったりする学習形態であれば、問題意識が高まり、その解決に取り組むことで思考を活性化させられる。また授業実践では、他者との協働的な活動のみならず、児童生徒の内省も組み合わせると思考を活性化する学習形態を作り出すことができる(ベネッセ 2015)。

八田氏(2015)は英語の授業で思考を活性化させる題材は以下の要素があると述べている。

- (1) 考えるきっかけを与える
- (2) 視野(世界観)を広げる
- (3) 発見や気づきがある
- (4) 感性に訴える
- (5) 自己表現を引き出す

八田氏は(1)～(5)を題材選定に利用しているが、同じように英語学習を行う際にも大切にしたいものでもある。例えば、音声指導の「聞くこと」の際にそのままCDを流し答えさせるのではなく、答えを事前に考えてからCDを流すことにより思考を活性化することができる。また、音声指導の「話すこと」の際、児童生徒が教員の後に英単語や表現を復唱する言語材料の練習だけではなく、児童生徒が言いたそうな語彙等で自己表現の機会も加えることで思考を活性化できる。このような活動は新学習指導要領において「言語活動」と定義されている。つまり、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなど

が言語活動である。そうでないものは、新学習指導要領では言語活動ではなく、言語材料の練習と言われる(中村、2017)。また、文字指導の「読むこと」・「書くこと」の際、新学習指導要領上、生徒が目的を持って読んだり、例文を参考にしながら書いたりすることが示されている。教員が文法の訂正するのではなく、児童生徒が自らサンプルと比較をし、正しい読み方や綴りを発見できるような工夫をすれば思考が活性化される。

3. 外国語教育を実施する教員の役割

思考を活性化させる学習形態を作り出すことは、今後、教員にとって重要な役割の一つになるだろう。小学校で外国語教育を実施する教員は、授業の流れや活動の実施方法において、私たちが考案した「The four Cs (Creative Collaborator providing learners with Comprehensible input and Communication opportunities)」という役割があると覚えておくと良い。つまり、担任教員は外国語を担当する教員や他の教員と協力(Collaboration)をしながら、児童生徒のために多くの「理解可能なインプット(Comprehensible input)」並びにコミュニケーションを図る体験(Communication opportunities)、つまり、言語活動を提供することである。なお、多くのアイデアやテクニックを創造的(Creative)に生み出す必要がある。「理解可能なインプット」とは内容の完全理解ではなく、知らない語彙や表現があっても、意味はほぼ理解できる内容のインプットである。言語習得理論の見解では、第二言語の上達のため、まだ身につけていない語彙や表現が少し含まれているこのようなインプットが良いと考えられている。以下で見て行く外国語活動と外国語科で行う「スモールトーク」及び教科書・補助教材の「Let's Watch and Think」のコーナーではこの役割の必要性が明確になっている。

4. 新学習指導要領における外国語教育

新学習指導要領において最大の変更点は、第5学年と第6学年で実施されている外国語活動が教科化され、年間35時間が年間70時間に増加することである（外国語活動の3・4年の早期化に伴い、5・6年生の生徒は70時間の体験的な英語活動を体験することになる）。外国語科の目標は「外国語でコミュニケーションを行うための素地を養う」から、「外国語でコミュニケーションを行うための基礎を養う」ことに変わる。すなわち、児童生徒の発達段階に応じて、頻度が高い英語の語彙や表現を4技能（話すこと、聞くこと、読むこと、書くこと）で取り扱うことである。授業実践は相変わらず、音声指導（聞くこと・話すこと）が中心になるが、英語での文字指導（読むこと・書くこと）に慣れ親しむ程度の実践を行うことになる。新学習指導要領やこの4技能は、ヨーロッパ言語共通参照枠（外国語の運用能力を同一の基準で測ることが出来る国際標準）から大きく影響を受け、話すことの技能を「発表」と「やりとり」に分けられ、今後4技能5領域と言われるようになる。

新学習指導要領では、第3学年と第4学年に下がる外国語活動の変更点は、内容からみて現行の学習指導要領とそう変わらない。外国語活動は今後も「体験的」に英語を学習することになり、目標も「英語でのコミュニケーションの素地を養う」と変わらない。つまり、外国語でコミュニケーションを図る積極性や外国語への興味・関心を高めることが目標となる。授業中の活動としては、音声指導（聞くこと・話すこと）を中心に行うことにも変わりはない。

このように児童生徒が小学校を卒業するまで600～700語程度を学習することになり、新学習指導要領で新しく導入された語彙・表現・文構造もある（例 代名詞のHe・She・We、助動詞のcan、過去形、動名詞）。過去形に関しては、音声中心の学習であることか

ら、出会う過去形の大半は「ed」を後ろにつける動詞ではなく、音声で聞き分けやすい不規則動詞（went, ate等）となる。動名詞の場合、「good at～」の後に使う「～ing」（enjoying, watching等）だけになる。しかし、これらは、あえて新学習指導要領では「文法項目」とは明記していない。小学校の外国語教育は「教える」というイメージより、「気づく」というのがポイントになる。中学校のような文法指導ではないことを忘れてはいけない。新学習指導要領では、文法の用語や用法の指導ではなく、「言語活動の中で基本的な表現として繰り返し触れることをとおして指導すること（MEXT 2017 p. 65）」のように指導すると新学習指導要領解説書かれている。また、指導要領では、「日本語と英語の語順の違い等に気付かせるとともに、基本的な表現として、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用すること。」と書かれている。つまり、基本的な文構造に慣れ、それを活用できることを狙いとしている。その方法とは、文構造を暗示的にどのようなコミュニケーション場面、目的、状況で使用されるのかを様々な形で経験をさせることが重要な指導ポイントである。

なお、現行学習指導要領で使われているHi Friends!と同じように、We Can!は文法や単語等の学習が目的とする「構造シラバス」や機能シラバスではなく、「様々な活動やタスク（歌、踊り、ゲーム、外国の話や物語を聞く、外国人と触れ合う等々）を通してコミュニケーションの道具としての英語に慣れ親しむことが求められているのである」（吉田 2009 p. 7）。つまり、学習者が関心の高い話題で教科書・補助教材が編成され、その話題に関連した語彙や表現を学ぶことを中心に単元が並べられているシラバスである。例えば、第6学年の夏休み後の話題は夏休みの出来事を取り扱う単元や12月に卒業文集を

書く時期には、児童生徒は小学校生活で最も大切な思い出を取り扱う単元がある。

第5学年と第6学年で使う教科書「We Can!」の各単元は8ページで構成され、アクティブ・ラーニングの視点や5領域育成を取り入れるため、いくつかのコーナーが前回の教材Hi Friends!より追加された。例として、各単元の最初の2項に「Let's Watch and Think」のコーナーがある。このコーナーには、単元の場面設定をしながら、話題に関する児童生徒の興味を引き出す狙いがある。具体的には、外国にいる小学生が自分たちの文化を紹介したり、日本人が取り上げているテーマについて英語で紹介したりする内容がある。このコーナーでは、生徒が最初からすべての語彙や表現を聞き取れるように指導するのではなく、目標は単元の8時間目までに単元目標としている語彙や表現を認識できるようにするということであり、多少難易度が高いと思われるレベルに設定されている。そしてこれが児童生徒の主体性につながる。つまり、このコーナーで児童生徒の単元の最終活動への見通しが可能になることによって、単元目標を達成するためにどのような内容を学ばなければならないのか等、児童生徒が自ら考え、自ら学習に取り組む姿勢を育むことが出来るのである。

5. We Can!の単元例

ここから新学習指導要領の移行期間（平成30・31年度）で第5学年が利用されている外国語科の教科書We Can!1のUnit 4を紹介する。まず、この単元が以下の3つの目標がある。

- (1)一日の生活について聞いたり言ったりすることができる。また、活字体の小文字を書くことができる。（知識・技能）
- (2)一日の生活に関するまとまりのある話を聞いておおよその内容をとらえたり、一日の生活について伝え合ったりする。（思考

力・判断力・表現力等）

- (3)他者に配慮しながら、自分の一日の生活について伝え合おうとする。（学びに向かう力・人間性等）

言語材料は頻度を表す副詞「always、usually」等と日課を表す語句「get up、walk my dog」等であり、表現は「What time do you get up?、I usually get up at 7:00.」等である。また、「時間」や「日課」の言語材料は第4学年からの既習事項でもあり、定着を促すためここでも繰り返し出てくる。

We Can!1のUnit 4の1時間目では最初の2ページ見開き（図1）を使い、他の国々の小学生が自分たちの日課を紹介している「聞くこと」の活動から単元的话题を導入しており、その中で既習・新出語彙と表現に出会うことになる。導入後、教員が自分の日課を紹介したり、新出語彙や表現の練習をする。以下でも見ていくが、ここで注意する必要なのは、練習とは言語活動ではなく、言語活動ができるための学習である。

次の2ページは3時間が割り当てられる。頻度を表す副詞を理解し、前時間に学習した「日課」と「曜日」について文単位で理解する活動から始まり、児童生徒同士で日課についてやり取りをする活動がある「What time do you get up?、I sometimes get up at ten.等」。

次の2ページは2時間で、家事について考える活動があり、その中、日々の生活を振り返ることができる。例えば、寝る時間が遅すぎることや、自分はクラスメートのように家事をしていないということに気づいたりする機会にもなる。指導書によると、教師の答えをモデルに生徒同士がやり取りをし、相手のサインをもらう活動も行う。

だけではなく、家族や有名人等の日課を話題にしてみると、英語学習以外、生活面等の気づきも生まれる。例えば、成績が良いスポーツ選手は早寝早起きをしていること等の発見で児童生徒の生活スタイルに良い影響を与えることが期待できる。このように一種の対話的な学びであるスモールトークを利用すれば、思考を活性化させることができる。

スモールトークを実践する際、第5学年で行うスモールトークは、教師が英語コミュニケーションのモデルになり、生徒からの応答を引き出すことが求められという。特に、各単元の最初のレッスンで言語材料の場面設定をするためにこの形を利用する。第6学年では、生徒同士のやり取りでコミュニケーション能力向上を目指し、他の単元で扱った言語材料をリサイクルし、その定着を促進する目的がある。言語材料の他、やり取りを続けるためのリアクション「How about you?」等のコミュニケーション・ストラテジーも育成する必要がある。従って、教員は、以下の例のように、言語材料だけでなく、生徒が話す内容にも反応し、どうやり取りを保つのかをモデルとして示す必要がある。

T: What food do you like?

S: I like pizza.

T: Oh, you like pizza. Me, too. What kind of pizza do you like?

6.2. 「聞くこと」の活動で思考を活性化

「聞くこと」の活動は多くの時間を占める外国語活動及び外国語科では、どう工夫すれば飽きさせないのかを慎重に考える必要がある。文部科学省が出版している研修ガイドブック(2017)でも書かれているように、「聞くこと」の活動を行う際、最も重要なのは「聞く必要性」を作り出すことである。「This is a pen.」というフレーズを聞く必要性を作り出すための案の一つ挙げる。提示するペンが図2のような箸の形をしたペンであればどうだろう。

写真の左側だけを児童生徒に見せ「I use this every morning at 7:00. What's this?」と問いかけると、児童生徒は箸と答えるであろう。そこで、「I use this to study every morning.」と言うと、「勉強」という単語から、自分たちの推測が違っていたと気づいたり、「なぜ、勉強のために箸を使うのか」と疑問に思ったりして、「This is a pen.」という答えを聞く必要性が出てくる。



図2. 割りばしの形をしているペン

(soraneews24.com参照)

また、児童生徒が「聞きたい」と思う気持ちにさせることが大切である。例えば、「聞くこと」の活動の前に答えを推測したりすると、自分の答えが合っているのかを知りたくて「聞きたい」という気持ちが芽生える。ここにも教員の大切な役割が存在する。大抵の児童生徒は教員の日常生活に興味を持っている。そこで、教員が自分の日常生活を題材にすることで児童生徒の「聞きたい」という気持ちを引き出すことができる。

それから、目的を持って聞く工夫もしたい。例えば、教員の「毎朝の日課はどの順番でやると思う?」という問いに、児童生徒が「brush my teeth, eat breakfast, take a shower, change clothes」等の絵カードを推測しながら並べる。その後、教員が実際の日課を英語で話し、それを聞きながら児童生徒が絵カードを並べ替えるという活動であれば、「聞く目的」が生まれる。

「話す（発表・やり取り）」活動を行う前に音声による十分なインプットが必要である。可能な限り、自然に児童生徒の口から目標語彙や表現が出るまで「聞くこと」の活動を行いたい。そのため、教員は同じ語彙や表現を様々な形で音声による活動を取り入れる必要がある。その中で、聞く必要性、聞きたいという気持ち、聞く目的があれば、児童生徒は耳を傾けて理解しようとするはずである。さらには表面的な言葉の理解だけにはとどまらず、新学習指導要領で大切にされている「見方・考え方を働かせ」、つまり、その言語材料が使われる場面、目的、状況の理解にもつながる。この目的・場面・状況の理解が深まれば、児童生徒の英語が楽しい・英語を使ってみたい気持ちは喚起され、それがのちに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に結びつくはずである。（中村 2017）。

We Can! 1のUnit 4で思考を活性化するもう一つの方法は、教員が「聞くこと」の活動として「日課」の語彙を児童生徒に提示するとき、聞こえた語彙を頭の中でイメージさせるというものである。例えば、「Go to sleep」と聞いた後、児童生徒に「What time did you go to bed?」や「What color pajamas were you wearing?」と問いかけたりすることである。同じように、「eat breakfast」の後に、生徒同士で何を食べていたのかを伝え合う指示を出すのも良いだろう。

もちろん、ゲーム形式の活動を取り入れることも可能ではあるが、その際の注意点は児童生徒全員が常に参加できる活動であることだ。例えば、サイモンセイブズというゲームは体の部位を練習する際によく使われる。児童生徒は教員の英語の指示（Touch your head.等）に従わなければならないのだが、指示とは別の動きをしたら座らなければいけないというルールがある。座った時点で負けが決定するので、負けた生徒はその時点でもう英語を聞く必要がなくなる。そこで少し工夫して、

「座ったまま3回正しく行うことができれば再び立つことができる」というルールを追加するとどうだろう。座った後でも児童生徒は活動に参加することができ、全ての児童生徒に沢山のインプットを与えることが可能になる。

英語の授業で頻繁に行われているこの様なゲーム的な要素が含まれている練習活動は、教員の工夫が足りない場合、つつい競争的な活動になりがちである。例えば、よく見られる単語カルタなどもその代表的な例である。勝ち負けを競うことは楽しいかもしれないが、学習としてはあまり意味がない。さらに、いつも負けてしまう生徒に「英語が苦手」という意識を植え付けてしまう危険性さえある。素早く相手から何かを取るゲームではなく、例えば、リズム良くペアで何かを言うゲームの方が効果的である。一例だが、ペアで協力しながら、一人は好きな色を言い、相手はその色に連想されるものを言う（S1: yellow → S2: banana → S1: red → S2: apple等）。日課の単元でも「S1: eat breakfast → S2: 7:00」のように日課→時間で行えば同様の活動をすることが可能になる。

また、「聞くこと」の活動において、児童生徒が英語を最後まで聞いていなければ良い「聞くこと」の活動としては成り立たない。具体例として、岡氏と金森氏(2008)が紹介している「真実の口」という活動がある。図3の様にS1が片手で口の形を作り、S2は片手を相手が手で作った口の中に入れる。教員が言う英文が正しい場合はそのままにし、正しくない場合はS1がS2の手を素早く掴み、S2は手を掴まれる前に素早く抜くと言うゲームである。英文は、例えば、「Today is Monday.」や「Penguins can fly.」等色んなバリエーションで利用できる。日課の単元であれば、先生の日課を聞いて理解した後、「I wake up at 12:00.」等で練習活動が成り立つ。

児童生徒にとっても教師にとっても、新し

い言語を学ぶのは簡単なものではない。しかし、児童生徒に「英語を使うことが負担だ」と感じさせることは避けたい。外国語教育の目的の一つは、児童生徒に外国語を用いてコミュニケーションがしたいという気持ちにさせることである。児童生徒が英語で話したり、やり取りを行ったりすることを負担に感じているのなら、それは「聞くこと」の活動が足りないからであるとも言える。



図3. 「真実の口」イメージ図(岡・金森 2008)

6.3. 「話す（発表・やり取り）こと」の活動で思考を活性化

「話す（発表・やり取り）こと」の活動の場合、同様に研修ガイドブック(2017)によれば、児童生徒が「英語で話す必要性」がある言語活動をデザインすることが大切になる。新学習指導要領における「言語活動」は自分の考えや気持ちを伝え合う活動である。ここで覚えておかなければならないのは、こういった活動を成功させるためにはしっかりと「段階」を踏んで言語材料の練習をする必要があるということである。まず、三浦氏・中嶋氏・池岡氏(2004)が考案した4つのコミュニケーション活動のレベルを利用し、この「段階」を考えていく(図4)。これらの段階を踏むことで、生徒が英語での言語活動を自信を持って参加できる。最初のレベル1~3は練習であり、レベル4は言語活動になる。

レベル1では、意味を理解している言語材料を発することのみであり、専門用語という「パターン・プラクティス」のことである。例えば、教師が「I like cats.」と言った後、

児童生徒がそれを復唱する。猫が嫌いでも復唱しなければならない。途中で、教員の指示に従い、児童生徒が一つの単語を入れ替える活動になる(catsをdogsに等)。レベル1の活動は児童生徒にとって英語を使うための必要な練習であり、英語を話すことへの自信を与える。

レベル2では、状況や文脈に依存し、意味を理解している言語材料のやり取りである。つまり、お互いに知っている情報について話をするので、発する英語は事実に基づいてはいるが、あくまでも話すことの練習に留まる。これは専門的には「Display Questions (提示質問)」と呼ばれる。例えば、クラスメートとペアで「What is your name?」または「Who is your teacher?」と尋ね合う様な活動がこれにあたる。

レベル3では、意味のある情報交換である。教育用語で「インフォメーション・ギャップ活動」とも呼ばれている。お互い情報は知らないでコミュニケーションの必要性は生まれるが、収集しなければならない情報は、外国語の練習のために過ぎない場合が主である。つまり、質問者が本当に知りたい情報であるとは限らないのである。例えば、教科書に出てくるキャラクターの日課について聞いたり、話したりする活動はこれに相当する。しかし、実施方法より、生徒が自分の考えや気持ちを伝え合うことができたなら練習ではなく、言語活動として成り立つが、先生が用意された情報を交換するだけであれば、練習になる。

レベル4は言語活動である。話者にとって価値のあるコミュニケーションから成り立っているものである。つまり、質問者が実際に知りたい、または話し手が実際に伝えたいことを英語で聞き出したり伝えたりするのである。そして、可能な限り各単元でレベル4の「話すこと」の活動を提供したい。例えば、ALTの日課を聞き出すことや自分の理想の一日をALTに発表するのはレベル4の「話

すこと」の活動になる。

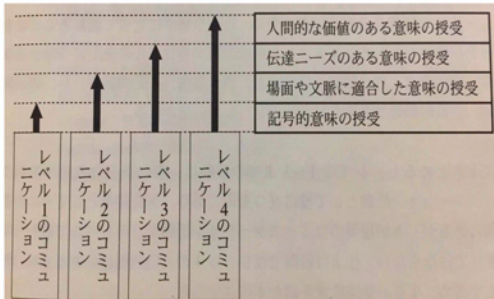


図4. コミュニケーション活動の4レベル
(三浦・中嶋・池岡 2004)

まとめると、レベル1～3の活動は「ドリル的な活動」で言語材料の練習になり、レベル4（場合によってレベル3も）は「自己表現」の要素があり、言語活動になる。新学習指導要領では意識的に各単元で言語活動を行う必要がある。効果的な「話す」活動を行うには、教師、英語専科教員、ALT等が知恵を絞って沢山のアイデアを協力しながら生み出さなければならない。

We Can!では、「話すこと」の活動が今までの外国語活動の授業に多かった、「楽しい」だけで終わるものが減っている。何故なら、このような活動だけでは学習内容は定着しない上、真のコミュニケーションではないと考えられている。「楽しい」だけでは、外国語教育の目標であるコミュニケーション能力育成には繋がりにくい。そのため、We Can!が提供している活動の多くは、人間関係を築くためのものや、コミュニケーションを図る体験が可能になるもので編成されている。しかし、そのまま行くと効果が薄れるので、それぞれの活動には教師の工夫が必要である。例えば、第1単元の自己紹介活動は、そのまま行うのではなく、児童生徒一人一人がキャラクターになりきり「S1: My name is Doraemon. What is your name? S2: Thank you Doraemon. Nice to meet you. I'm Pikachu.」等、少し設定を工夫すると、

誰がどのキャラクターを選んだか等、児童生徒の興味・関心を刺激することになり、やりとりの動機と必要性が生まれる。また、好きなキャラクターの自己表現の機会にもなる他、児童生徒がお互いのキャラクター選択についてのコミュニケーションを図るきっかけにもなり、結果、人間関係の構築にもつながるのである。

6.4. 「読むこと」・「書くこと」の活動で思考を活性化

新学習指導要領において最も現場で懸念されているのはこの2技能の指導方法である。今まで小学校で殆ど指導して来なかった技能でもある。しかし、不安な原因はもしかすると、中学校英語の授業をイメージしているからではないだろうか。新学習指導要領において、「読むこと」・「書くこと」の活動の目標は、児童生徒が既に知っている音を書かれた言葉に結びつけることである。そして、もっと読みたい、もっと書きたいという気持ちにさせることである。多くの音声によるインプット活動を通して言語材料に十分に慣れ親しんだ後、各レッスンで「読むこと」・「書くこと」の活動の時間を可能な限り設けることを文部科学省も推奨している。

文部科学省作成の小学校外国語活動・外国語の研修ガイドブック(MEXT 2017)に基づいて、We Can!1のUnit 4の授業内容を考えると、まず、「聞くこと」・「話す(発表・やり取り)こと」の活動を中心に言語材料に慣れ親しんだ後、読んだり、書いたりする活動を行う。その後、1～5時間目の場合、音声を聞きながら言ったり・読んだりした後、ワードボックスから語彙を選んで()に書き写す。

1時間目 : I (get up) at (時間) .

2時間目 : I (go to school) at (時間) .

3時間目 : I (go home) at (時間) .

4時間目 : I (eat dinner) at (時間) .

5時間目：I (go to bed) at (時間) .

その後、6～7時間目には1～5時間目にワークシートに書き写した文を読んだり言ったり、修正したりする。

6～7時間目：I get up at 06:00. I go to school at 07:30. I go home at 3:00. I eat dinner at 6:00. I go to bed at 9:00.

8時間目には例えばスピーチ原稿として使用するために清書する活動を行う。

We Can!1の単元1～3の目標はアルファベットの大文字と小文字を書けるようになることなので、この単元ではより徹底した指導が必要になるだろう。

まず、新学習指導要領において、「読む」ことの活動例は以下のように示されている。

(ア) 活字体で書かれた文字を見て、どの文字であるかやその文字が大文字であるか小文字であるかを識別する活動。

(イ) 活字体で書かれた文字を見て、その読み方を適切に発音する活動。

(ウ) 日常生活に関する身近で簡単な事柄を内容とする掲示やパンフレットなどから、自分が必要とする情報を得る活動。

(エ) 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を、絵本などの中から識別する活動。

「読むこと」の活動の場合も読む目的を生み出す必要がある。これは「聞くこと」の活動と同じように、読む前に児童生徒に内容を推測させる等もできる。We Can!に「Story Book」という新コーナーがある。We Can!1のUnit 4であれば、デジタル教材を利用し、英文を隠しながら絵を見て、どの単語が出るのかを推測し、当たった単語を見せるという活動を行った後、全員で本文を音読する活動を指導書で紹介している。

文字指導では、教科書の本文や教科書・補助教材で扱われる活動のみを使用する必要はない。児童生徒の身近にあるものも使うこともできる。例えば、イニシャル、頭字語、絵

本、または、既習の語彙や表現が書いてあるフラッシュカード等が使える他、他教科・地域・学校の人物や場所の名前や外来語を書いたりするのも良いだろう。

注意する必要があるのは、音声十分に慣れ親しんだものに限る。例え新しい語彙を書きたい場合は、音声でまず導入する必要がある。もしも児童生徒が、例えば「seaweed」という単語を読んでいる際、「d」を強く発音し過ぎている様な習熟度の場合は、読んだり、書いたりする活動の導入は早すぎる。こういった場合には、新学習指導要領では「音声で十分に親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味がわかるようにする」と書かれているように、「読むこと」・「書くこと」の活動の導入の前に、英語の文字と音の指導が必要である。新学習指導要領において、中村(2017)が以下のように系統的な文字指導を紹介している。

- (1) アルファベット文字の名称が分かる。
- (2) アルファベット文字の大文字と小文字の対応が分かる。
- (3) アルファベット文字の読み書きができる。
- (4) アルファベット文字の音が分かる。
- (5) 音声に慣れ親しんだ表現を書き写すことができる。
- (6) 音声に慣れ親しんだ表現（あるいは表現の一部）を自分で選んで書き写すことができる。
- (7) 文字を利用して文構造について意識する。

「読むこと」・「書くこと」の活動は第5学年の中盤から始めることになっている。その前に児童生徒は30時間以上の授業時間でアルファベットを認識できるようになったり、アルファベットの大文字と小文字をかけるようになったり、アルファベットを見て発音できるようになったりする力を育まなければならない。正しく実践すると、その次に児童生

徒が英語を読んだり、書いたりしたいという気持ちになるはずである。その気持ちを持って読んだり、書いたりすると、児童生徒が英語特有のルール（単語と単語の間にスペースが必要等）を発見する可能性が高くなる。小学校卒業段階には児童生徒が1) アルファベットを書ける、2) モデルを利用すれば単語が書き写し、3) 例に基づいて5行程度の文章を書けるという目標がある。

6.5. 単元末の言語活動

We Can! に合わせた単元末の言語活動は、教員が児童生徒に合うものを用意することになる。この言語活動は各単元の学習目標のためにも設定したい。良くある言語活動の一つに「ショッピングごっこ」がある。しかし、例えば、すでに値段が見えてしまっている中でのショッピングゲームであれば、値段を相手に尋ねる必要がないので、自己表現が入った言語活動とは言えない上、思考を活性化する活動とも言えない。少し工夫して、児童生徒がいくつかの店に行き、どの店の商品が最も安いのか、どの店の接客が一番良いのか等を見極めることが目的にある言語活動であればどうだろう。より意味のある活動になるのではないだろうか。

ここでの注意点も同様に、「どの店が最もお金を儲けるか」や「5分で10ドルを使いこなす」等の競争が中心の活動は避けたほうが良いという点である。可能な限り、単元末の言語活動は児童生徒同士が協力しあえる活動にしたい。例えば、ショッピングゲームであれば、ALTは児童生徒のペアに2つの好物を購入するミッションを与え、パーティーに間に合うようにお使いを頼むことにすれば、彼らはそれぞれの店に出かけて新鮮で安いものを手に入れる等協力が必要となる活動になる。そして活動中、それぞれの店舗の情報交換等のための、真のコミュニケーション体験も得ることができる。

また、言語活動の一つである英語での自己表現が大切になることも忘れてはいけない。「日課」の単元での単元末の言語活動は以下のようなものも実践可能である。言語活動の目的を「理想的な夏休みの過ごし方をALTと共有する」とし、「理想的な休日」をALTに発表する。この活動は自己表現の要素が含まれている言語活動にもなる他、英語を使う必要性も兼ね備えている。We Can!のUnit 4を夏休み前の7月に行なえば、夏休みの良い過ごし方を考えるきっかけにもなる。この活動は以下の段階で行ってみてはどうだろうか。

- 1) 自分の理想の1日を考える (*I get up at …私は～に起きる。、I eat lunch at…私は～に昼食を食べる。I go to … at …私は～に～に行くなど*)。
- 2) クラスメートに発表をし、アイデアをシェアする。
- 3) そのアイデアから自分の理想の休日を再考し、修正する。
- 4) 班で理想的な夏休みの過ごし方を作成する。
- 5) 班でALTに「理想的な夏休みの過ごし方」を発表する。

どの単元末の言語活動にしても、単元の冒頭で最終目標について考える時間を与える必要がある。すると、児童生徒の問題意識並びに学習モチベーションを高め、より主体的に取り組むようになるはずである。つまり、児童生徒が目標を達成するため、自らどのような語彙を知る必要があるのか等を考えるきっかけになる。単元末の言語活動に至るまでの多くの「聞くこと」・「話すこと」・「読むこと」・「書くこと」を通して、児童生徒は自分自身・クラスメート・世界について学ぶことになる。これはつまり最終目標から単元をデザインする「逆向き設計(backward design)」から「主体的・対話的で深い学び」を促進する方法でもある。

6.6. 絵本や歌で思考力の活性化

知らない言語の絵本を読んだり聞いたりしたことはあるだろうか。例えそれが知っている物語の絵本であったとしても、何度読んだところで、何度聞いたところでその言語を理解することはできないだろう。どの「聞くこと」の活動にしても、理解可能なインプットでなく、ただ単に「英語のシャワー」を浴びせるだけの活動であれば意味がない。教員は常にどの絵本や歌を利用すれば、理解可能なインプットになるのかを考えて選定する必要がある。例えば、以下の絵本はどうだろうか(図5)。



*Brown Bear, Brown Bear, what do you see?
I see a Red Bird looking at me.
Red Bird, Red Bird, what do you see?
I see a Yellow Duck looking at me...*

図5. 絵本「BROWN BEAR」

(us.macmillan.com参照)

この絵本であれば、多くの語彙や表現を繰り返して出る上、絵もわかりやすい。教員が児童生徒に「What's next?」等を尋ねれば、コミュニケーション活動としても利用できる。

絵本と同様に、歌やチャンツは理解可能なインプットとして多く利用すべきである。また、「話すこと」の活動の準備段階で利用すると効果的である。教員の好みで洋楽のポップスを聞かせたり、歌わせたりすることは効果的な英語学習とは言えない。特に、児童生徒が訳を欲しがったり、歌詞にふりがなを振っていたりすると、その活動は「聞くこと」の活動ではなくなる。不自然なリズムの歌詞、速すぎる歌詞、また発達段階に合っていない歌詞等は上述の知らない言語の絵本を読んでいるのと同じである。良い歌の特徴とは、短いフレーズの歌詞、覚えやすい歌詞、児童生

徒がすでに知っているメロディの歌、児童生徒が殆どの語彙を知っている歌詞、日本人の英語学習者向けに書かれた曲、曲の途中でリズムよくリピートできる歌、歌いながら自己表現が可能な歌である。金森氏(2017)が作成したものはその一例である。We Can!1のUnit 4で使用できる「Get Up」の歌詞をご覧ください。

Get up (Get up)

Wash your face (Wash your face)

Brush your teeth (Brush your teeth)

Comb your hair (Comb your hair)

Have your breakfast (Have your breakfast)

Say "Good Morning." (Say "Good Morning.")

括弧の部分は復唱できるので、良いインプットとアウトプットの練習になる。さらに、「Are you hungry?」の歌詞はどうだろう。

Are you sleepy? Yes, I am.

Are you hungry? No, I'm not.

Are you angry? Yes, I am!

Are you happy? Yes, I am!

この曲の特徴は、質問に答えられるようになってきていることである。導入時は聞くだけでも良いし、質問だけの分を歌っても良い。慣れてくると、児童生徒が自分の気持ちを曲にのって答えられるようになる。最後に、「My name is Erika.」のように、ペアになり、コミュニケーションができる歌もある。以下が歌詞である。

Hello, my name is (Erika). Nice to meet you.

Do you like (cats)?

(Yes, I do. Yes, I do.)

Hello, my name is (Takuya). Nice to meet you.

Do you like (frogs)?

(No, I don't. No, I don't.)

歌詞の括弧の部分は児童生徒が言いたいことに入れ替えられるようになっている。この

歌は毎年大学生と歌っているが、毎回「頭を使わないと歌えない」とコメントする学生がいる。つまり、これこそ思考を活性化させる活動なのである。児童生徒にとって、絵本や歌はより多くの理解可能なインプットを得るためにとても効果的である。各レッスンで多く利用し、様々な言語活動へ繋げ、児童生徒がより自信を持って「話す（発表・やり取り）こと」の活動に取り組めるように支援しましょう。

7. おわりに

小学校外国語教育の目標はコミュニケーション力を図る基礎となる資質・能力の育成であり、目的は中学校で英語をもっと学習したいという気持ちにさせることである点を考えると、小学校英語教育が学びに向かう力につながっているのが分かる。中学校教員が最初の数ヶ月間、中1の生徒に英語を学習する動機付けや、英語が好きになるような働きかけをしなければならないような状態にしてはいけない。小学校の外国語教育は児童生徒にとって初めての英語学習の場になる。そしてそれは今後の学校生活に多大な影響を与えることになる。私たちの使命はその経験を良いものにすることであり、その良い経験の積み重ねが学びに向かう力を生むことという事を信じて疑わない。

参考文献

- (1) 岡 英雄・金森 強『小学校英語教育の進め方―「ことばの教育」として』 成美堂出版、2008
- (2) 金森 強『歌でおぼえるらくらくイングリッシュ1』成美堂出版、2017
- (3) 竹内 理「英語授業におけるアクティブラーニングの実質化をめざして」『TEACHING ENGLISH NOW』31、2015、三省堂出版、pp. 2-3
- (4) 中村 典生「中学年における外国語活動と、高学年における外国語科、並びに中学校及び高等学校における指導との接続」大城賢（編）『平成29年版小学校新学習指導要領ポイント総整理外国語』東洋館出版社、2017、pp.102-109
- (5) 八田 秀樹『生徒の思考活動を活性化させるための英語科学習指導の工夫』東京書籍、2015
- (6) ベネッセ「思考を活性化させる授業デザインツールとしてのアクティブ・ラーニング」『View 21』10、2015
- (7) 三浦 孝・中嶋 洋一・池岡 慎『ヒューマンな英語授業がしたい！』研究者出版、2004
- (8) MEXT（文部科学省）『We Can!1』・『We Can!2』暫定版・指導書、2017
- (9) MEXT（文部科学省）『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』、2017
- (10) MEXT（文部科学省）『小学校学習指導要領』、2017
- (11) MEXT（文部科学省）『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語科編』、2017
- (12) MEXT（文部科学省）『新学習指導要領の考え方』、2017
- (13) 山地 弘起「アクティブ・ラーニングとはなにか」『JUICE Journal』1、2014
- (14) 吉田 研作「小学校での英語活動の意義について」『ARCLE REVIEW』3、2009、pp. 6-13